



ねこの灯油屋さん

## ねこの灯油やさん

---

日が沈むと、急に冷たくなった風が、イチヨウ並木の黄色い葉をふるわせています。その木に隠れるようにして、やせた小さな三毛ねこが、とぼとぼ歩いていました。

♪北風ピュルルン、お部屋ぽっかぽか、灯油やで～す

どこからか聞こえてくる音楽が、少しずつ近づいて来ました。ねこは耳を立て、鼻をムグムグさせました。大嫌いな臭いで、目から涙が出てきました。

ブロック塀の角からのぞくと、一軒の家の前に、音楽をかけたまま、小型のトラックが停まっています。荷台には、大きな銀色の長丸い筒が乗っています。門に置かれたポリ缶に、タンクから、ホースで灯油を入れているお兄さんが見えました。髪の毛はイチヨウの葉みたいな色で、耳に銀色の輪が三つくっついています。

「ありがとうやった！」

門を閉めようとした時、お兄さんは、自分を見つめている子ねこに気づきました。ねこは、ミャーと、かぼそい声で、なきました。

「ショボイねこだなあ」

お兄さんは、そう言うのと運転席に座りました。そして、ほほをゆるめると、パンを投げて、すぐ車をスタートさせました。

その日から、ねこは『♪北風ピュルルン』という音楽がかすかに聞こえてくると、夢中で走っていくようになりました。

「またいるのか、しょうがねえなあ」

そう言って、お兄さんはお弁当の残りを分けてくれました。ねこがすり寄っていくと、

「おまえ、のらねこだから、名前は『ノーラ』だな」

笑いながら、ちょっとのどをなでてくれました。ノーラは、お兄さんの大きくてかたい手を何度もなめました。お兄さんの目や声も大好きになりました。嫌いだった灯油のにおいにも、だんだん慣れてきました。

日が過ぎて、イチヨウも枝だけになりました。北風がその枝を激しくゆらします。ノーラは、今日も灯油やさんを追いかけて走ります。もちろん車に勝てっこなんてありません。だけど、この辺りでは、灯油を買う家が多く、そのたびに停まるので、なんとか追いつけるのです。ミャーミャーと、体をすり寄せてくるノーラに、お兄さんは、いつもお弁当を分けてくれました。

「今日は、鯨の開きだぜ、うまいぞ。明日から正月。しばらく商売は休みだ。元気にしてろよ」

そう言って、煮干しのいっぱい入った袋を、イチヨウの落ち葉の中に隠しました。

初めての冬は、寒くて冷たくてひもじくて、ノーラは家と家のブロック塀のすきまにうずくまって過ごしました。お兄さんにだっこされている夢をみて、お正月が終わるのを待ちました。

やがて、イチヨウの木も、やわらかい芽を出しました。ノーラは、お日さまの光りを浴びて、今日も、灯油やの車を追いかけています。こんなやさしい風に包まれて、お兄さんと出会

える毎日が続くと思うと、ノーラはうれしくてたまりません。

ある日、お兄さんは、缶詰をノーラに食べさせながら、言いました。

「春になったなあ。灯油やは今日でおしまい。もう明日から来ないんだぜ。ノーラも大きくなったんだから、えさも自分で探せるだろ。元気でな」

運転席の窓から手を振ると、お兄さんは、エンジンをかけました。ノーラは必死で追いかけてましたが、もう車は停まりません。それでも力いっぱい走りました。

寒くてもいい。

冷たくってもいい

おにいさあん！

ノーラは、苦しくて、とうとう倒れてしまいました。

バックミラーに映ったノーラを見て、お兄さんは、あわてて車を止めました。そして、ドアを勢いよく開けると、全速力でノーラに向かって走って来ました。ノーラは、よろよろ立ち上がると、お兄さんにすりよってきて、小さくミャーとなきました。

「しょうがねえなあ」

お兄さんは、ノーラをそっと抱き上げて、頬ずりをすると、つぶやきました。

「子供の時仲良しだったねこに似てるんだよなあ、おまえ。まいるよ」

また、イチョウが町を黄色く染める季節になりました。

♪北風ピュルルン、お部屋ぽっかぽか、ねこの灯油やで～す

あの灯油やさんの車の助手席には、つやつやした三毛ねこがちょこんと座っていました。